

(概 要)

令和2年度（2020年度）元気なふるさとづくり研究会 議事録

1 日 時

令和2年（2020年）7月10日（金）10：00～11：30

2 開催方法

Z o o mを使用したWEB会議

3 出席者

別紙名簿のとおり

4 議 事

- (1) 令和元年度 ほっかいどう元気なふるさとづくり交流大会の開催結果について（報告）
- (2) 令和元年度 元気なふるさとづくりミーティングの取組事例集について（報告）
- (3) 今年度の事業（案）について

5 主なご意見

- (1) 令和元年度 ほっかいどう元気なふるさとづくり交流大会の開催結果について（報告）

【松村委員】

- 非常に有意義な会であった。事例発表では、地元の人が自分たちの良いところに気がついて、誇りを取り戻し、地力を上げるような動きがあることが印象的。

【石塚委員】

- 各自治体の参加者が非常に少ないという傾向がある。
- WEB環境が一般化してきていることから、実施主体の取組みをシェアする環境を作っていくことが重要。取組を構造化して、情報を提供していくことも課題。

【井上委員】

- この研究会では、北海道の基幹産業である農業振興に関わるような取組が取り上げられるケースが少ないと感じる。今後、農業振興に関わるようなケースをできるだけ多く取り上げていただければありがたい。

- (2) 令和元年度 元気なふるさとづくりミーティングの取組事例集について（報告）

【原委員】

- 視察した事例では、今後、関係者が高齢化する中で、事業が継続できるかが不安。人材的にも新陳代謝しながら、それぞれの事業を継続していくことが課題。伴走的にやれると良い。

【鈴木委員】

- Z o o mなどオンラインで直接会わなくても良いというように、価値観がかなり変わってきた。地域づくりにどれだけうまく活用できるのかを今後真剣に考える必要がある。
- 定住人口よりも関係人口が大事になっていて、有益なツールとしてZ o o mの会議などが重要な一つの柱。良いアイデアや首都圏の情報をうまく引き出すことが、これからの大事な戦略になる。

【松村委員】

- 田舎にも人が集まる拠点が必要。拠点では人が集まるだけではなく、地域の課題やニーズの集積の場にもなりうる。
- 事業の立ち上げに加え、継続することの難しさが相当ある。単一事業や既存の事業に固執しないで、新たな地域ニーズを捉えるような仕組みを作って、小さなビジネスを複数こなしていくというのが今後の地域づくりの一つの回答ではないか。

【杉岡委員】

- 行政と民間の公民連携のあり方について、中間支援組織などの場づくりや活動の持続性を支えるためのサポートセンターが必要になってきている。
- 株式会社、NPOや、行政の退職者をいろいろ活用する中で、さまざまなネットワークをきちんと作り出していくことがポイントになる。
- そうした団体と行政がどう関わっていくかなかなか難しく、振興局の仲介的な役割をきちんと位置付けるような、関わり方を考える必要がある。

(3) 今年度の事業(案)について

【石塚委員】

- 地域づくりミーティングは、個人的には良いプロジェクトだと思うが、公共性を考えたときに、コスパは悪い。もっと道民や全国に発信する取組と連携していないともったいない。
- 開催方法については、現場に行かなければいけない割合は、4分の1ぐらい。あとは、WEB方式で報告をいただくことで理解を深められる。WEBでの開催などの新しいやり方を考えてもいい。

【杉岡委員】

- 元気なふるさとづくりの目玉は、ふるさとづくりを担ってく人達の絆、横の繋がりをどうやって役立てていけるかということ。同じ志を持って活動している方に集ってもらい、関係者がそれぞれ課題になることを受けとめて、名刺交換をし、友達になることに非常に大きな意義がある。
- 我々の役割は、アドバイス、仲間同士をつなぐこと、仲間の話し合い、気付きをうまくつないでまとめていくところが本当になると思う。Zoomでやるのは賛成できない。

【井上委員】

- 視察は我々だけでなく、地域おこし協力隊の方なども参加して、現地を視察することに意味がある。
- 生産や製造の現場は現地に直接行って見てみないと分からないことが多い。サービス供給の分野はZoomでもできる。生産製造と現場の視察という点を踏まえると、やはり現地に行って勉強するのが今後の地域振興に役立てる一つの大きな要因があるので、できる限り実施させていただきたい。

【原委員】

- パワーポイントの説明を聞くのであれば、Zoomでやってもあまり変わらない。リアルとバーチャルのバランスをどうとっていくか。現場を見てもらいながら、そこで話を聞くのであれば、パワーポイントで感じられないものを感じられるので良い。振興局などに集まったり、それぞれZoomで参加してもらえるような方法でパワーポイントで説明するようなものと、リアルな現場を視察するところは残すような、それぞれの形で分ける方法もあるかなと思う。

【松村委員】

- リモート会議をこなしている感想として、現行の会議の半分程度は、Zoomでの開催でも問題がないと考えている。ただし、初対面の集まりでは議論が活性化しない傾向を感じる。基本的に現場を見られるのであれば見たほうが良いと思うが、現場で活動している方が動画を撮ってそれを流す方法も可能かと思うので、状況によってはZoom開催にチャレンジする価値はある。
- 一緒に見に来てくれる市町村の方や周辺の地域おこし協力隊の方が、一緒に議論する場がとても重要で、それらの人達がどんな悩みを持って、それをどうやって解決したらいいのだろうかという、解決の糸口が得られている。Zoom会議にしても、我々メンバーと、活動者だけをどうつなぐかだけでなく、同じような悩みを持ついろんな人が参加できる方法を考えられたらいい。

【鈴木委員】

- できれば現地に行ったほうがいい。体験できるにこしたことはない。一方で、消毒を徹底しなければならぬなど、受け入れる側の負担もある。二つの方法を今年テストケースでやってみたらいかがか。一つ目のケースは、実際にその場に行かなくてもある程度みんながわかる場合はオンラインで。現地行かないとどうしても分からないケースは、希望者にそこに行っていくだけで。そうすることで、それぞれの問題点がわかってくる。来年以降どのように考えていくのか、検討する上で参考になる。

【杉岡委員】

- 農福連携を含めた、農業の生産環境の持続性に取り組んでいるところにフォーカスして、どんな解決策を図っているかということも興味がある。

【松村委員】

- 道東のある町では、多くの農家の子どもが釧路の学習塾に通っていたが、JAが塾の講師を連れてきて学習塾を作った取組がある。
- こうした事例の集め方については、振興局をもう少し機能的に使うと良いのではないか。
- ミーティングに行くときに振興局の方も参加されているが、そこで初めて、われわれと同じように初めて知りましたみたいな人が多い。振興局のふるさとづくりミーティングにおける位置付けを強化すると活性化するのではないか。

【井上委員】

- 浜中の事例は、ある程度時期が来ると、また新たな課題に対応しなくちゃいけないという状況に対応しているケース。ある程度成熟期に来て、新たな課題に対応しているケースを学ぶというのも一つの手。浜中を調査先として位置付けるのは賛成。

【鈴木委員】

- 地域の公共交通がかなり疲弊していて、特にコロナの影響で相当利用が落ちている。うまい工夫をしながら、そういったコロナと共生しながら地域の足を確保しているような事例がもしあれば、参考になるし、水平展開できるのではないか。
- 今回、地域の足を支える的な内容がほとんどないので、各振興局に、ここはかなり面白いことやっていると、あまり利用客が落ちないでうまく維持できそうだというのであれば、それも加えていただくよう検討いただくと、自治体は同じ問題を抱えていると思うのでかなり参考になる。

【石塚委員】

- 酒をテーマとした視察はどうか。一次産業を高付加価値化するということについて、北海道はまだまだ伸びしろがある。酒米の生産環境についてもいろいろな話題が出てきている。東川町の酒蔵誘致、上川大雪酒造が帯広畜産大学と連携して新しい酒造研究所をつくる、積丹でジンを作るプロジェクトが生産開始されたとか。北海道のポテンシャルを生かして、食と酒を結びつけるというのはブランディングとしても良い。
- 農業の人材不足と企業のサテライトニーズをうまく結びつける事業はないか。JALの添乗員が今、減便の中で、営農に従事している。北海道ならではのサテライト環境の良さと、雄大な環境での農業体験というのを結びつけたWinWinのモデルができると面白い。

【井上委員】

- 地場産業原料を使った酒類の製造とそれを活用した地域振興は、日本酒よりもワインが先行しているので、ワインをテーマにした地域も視察候補にしてみてもいかがか。

【鈴木委員】

- お酒に関連し、留萌ではタクシーで色々な所をめぐって、お酒も飲めるし、地域のおいしいもの食べられますという取組がある。水産物等とお酒の組み合わせという意味では、留萌は面

白い取組をやっている。

【松村委員】

- 途中旭川を通るようなルートであれば、私どもの研究所に寄っていただいて、地域のテーマの研究についてご紹介をさせていただきたい。

以上